# 科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号: 15301

研究種目: 基盤研究(C)(一般)

研究期間: 2013~2015

課題番号: 25462684

研究課題名(和文)舌癌動物モデルにおけるTAMの浸潤とCOX-2の関係

研究課題名(英文) Association between infiltration of TAM and COX-2 expression in the tongue cancer

of mice

研究代表者

折田 頼尚 (Orita, Yorihisa)

岡山大学・大学病院・講師

研究者番号:90362970

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):舌癌マウスモデルにおいて発生初期に抑制性T細胞(Treg)、interleukin 10 (IL-10)が多く進行とともに減少し、transforming growth factor (TGF- )は初期に少なく進行とともに増加傾向であることがわかった。COX-2阻害薬は舌癌の発生・進行およびTregの浸潤を抑制しなかった。舌癌の治療には癌発生初期にTregを抑制することが重要だと予想された。

研究成果の概要(英文): A mouse model of 4-nitroquinoline-1-oxide (4NQO)-induced-tongue squamous cell carcinoma (SCC) was established. The expression of Forkhead box P3 (Foxp3), interleukin 10 (IL-10), and transforming growth factor (TGF-) was determined using real-time quantitative polymerase chain reaction (RT-PCR). Foxp3 expression was also analyzed using immunohistochemistry. The results were compared with those of control mice and of 4NQO-treated mice treated with a Cyclooxygenase-2 (COX-2) inhibitor. Well to moderately differentiated tongue SCC was induced in all of the experimental mice. The amount of Tregs of the experimental mice was over 10 times as much as control mice at the early stage of tumor progression. COX-2 inhibitor did not prevent the progression of tongue SCC and did not reduce the total amount of Tregs. Tregs function at the early stage of the development of tongue SCC and it may be effective to suppress Tregs at the early stage of tumor progression for the treatment of tongue SCC.

研究分野:頭頸部腫瘍学、腫瘍免疫学

キーワード: 舌癌 抑制性T細胞 COX-2阻害薬

#### 1.研究開始当初の背景

単核貪食細胞であるマクロファージは、本来 抗腫瘍免疫に関わる細胞とされてきたが、近 年、腫瘍関連マクロファージ (tumor-associated macrophages (TAMs)) の殆どが腫瘍抑制ではなく進行に寄与する ことが明らかとなった(1)。すなわち、抗 原提示に関わる "activated" (M1)マクロフ ァージが、ある環境下にあると癌の進行を促 す "alternatively activated" (M2)マクロ ファージにその phenotype を変換すると言う 考えである。また、抑制性 T 細胞 (regulatory T cells (Tregs))は自己免疫を調整する働き を担い、他の免疫細胞の働きを抑制する(2、 3)。その働きは自己免疫の調整には不可欠 であるが、腫瘍免疫には不都合である。これ までに種々の癌において Tregs は CD8 陽性 T 細胞の抗腫瘍作用を阻害し、その癌微小環境 への集積は予後不良因子と報告されてきた (4-7)。しかしながら、頭頸部癌領域にお いての研究は少なく、Tregs の集積が予後良 好因子であるという通常とは逆の報告も散 見された(8-10)。頭頚部癌領域の癌に関 しての研究があまり進んでいない理由の一 つとして、頭頚部癌の動物モデルが作りにく い点が挙げられた。免疫抑制マウスで発生さ せた癌では、それをそのまま通常のヒトに当 てはめることができない。我々は、野性型マ ウス舌に 4-nitroquinoline-1-oxide (4NQO) を投与することで舌癌を発生させる手法を 用いた(11)。この方法で発生する舌癌は、喫 煙によって生じるメカニズムに類似してお り、前癌病変を経て癌へと進行していくとい う、通常の癌発生に近い経過をたどると言わ れている。また、口腔と食道にしか癌が発生 しないのも実際の癌発生過程に近い状況と 言える。我々は、このモデルマウスを作成し、 癌の発生過程における TAM の浸潤、phenotype の変化、局所の microenvironment の観察、 及び癌発生の予防・早期治療へのヒントを考 察する本研究を立案した。

# 2. 研究の目的

当初は舌癌動物モデルにおける TAM の浸潤を みる実験を計画した。この舌癌マウスモデル は発がん物質 4NQO の投与開始から1クール最 低30週を要する実験であるため、最終結果が 出るまでにかなりの時間を要する。その実験 の途中結果で、このモデルでは殆ど TAM の浸 潤が見られず、その動向を観察することが困 難であることが判明してきた。そのため、舌 癌の発生・進行過程における Treg の動きを観 察することにした。Cyclooxygenase (COX)-2 はプロスタグランジン E2(PGE2)の産生を誘導 し、PGE2 はナイーブ CD4 陽性 T 細胞に Forhead box P3 (Foxp3)の発現を促し、Treg に分化さ せる働きがあることがわかっている(12、13)。 そのため、舌癌発生過程において COX-2 阻害 薬を同時投与し、癌の発生・進行、およびTregs の浸潤にいかなる影響が見られるか観察を行 った。

# 3 . 研究の方法

6週齢の C57BL/6 マウス 80 匹を用いた。その うち 60 匹に 4NQO を 200µg/ml で飲料水に混 じ最長 20 週間まで投与しその後は純粋な飲 料水を与えた。その 60 匹の発癌マウスのう ち、20 匹には通常の餌を与え、40 匹には COX-2 阻害薬を混じた餌を与えた。今回用いた 20 グラム程度のマウスが一日に摂取する食事 の量を 3 - 5 グラムと見積もり、62. 5μg/g で COX-2 阻害薬を混じた餌(ほぼヒト常用量に 等しい)を 20 匹に、もう 20 匹には 187. 5µg/g (ヒト常用量の3倍)の濃度でCOX-2阻害薬 を混じた餌を与えた。残りの20匹のコント ロールマウスには純粋な飲料水と通常の餌 のみ与えた。この舌癌マウスモデルでは、15 週頃から severe dysplasia、20 週頃から扁 平上皮癌(SCC)が見られ、25 週ではほぼ 100% の動物に SCC が発生する。また、32 週ころか

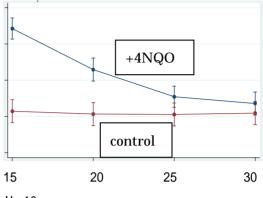
ら死亡するマウスが出始めるため、各群から 15、20、25、30 週から 5 匹ずつ無作為に取り 出し屠殺し、舌組織を摘出した。舌組織の写 真を撮影した後正中で2分し、一つは10%ホ ルマリンに保存、もう一つは real-time quantitative polymerase chain reaction (RT-PCR)用に 80 で保存した。ホルマリン で保存した標本はホルマリンに包埋し、3µm 薄切標本を作成し、まず各個体から数枚ずつ HE 染色を施行し、癌の進行具合を確認した。 凍結標本は power masher ですり潰し、RNA を 抽出後、Foxp3、IL-10、TGF- の RT-PCR を 施行した。先ほどの薄切標本では、各標本の 中心部の切片を各群から1枚ずつ選び、CD8、 CD4、Foxp3 の免疫染色を行った。CD8 陽性細 胞と Foxp3 陽性細胞の数を 200 倍(0.933mm²) の視野 5 か所でカウントし、各切片の平均値 を算出した。RT-PCR の結果は、ANOVA にてま ずコントロールマウスの結果と 4NQO のみ与 えられたマウスの結果を比較し、続いて 4NQO のみ与えられたマウスと、2種類の異なった 濃度の COX-2 阻害薬を与えられた 2 群との比 較を行った。そして CD8 陽性細胞数と Foxp3 陽性細胞数をこれら4群の間で比較を行った。

#### 4. 研究成果

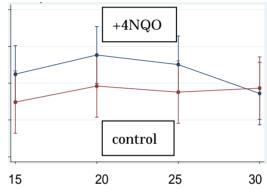
4NQO を投与されたマウスでは 10 - 15 週で moderate to severe dysplasia、15 - 20 週で severe dysplasia および SCC が、そして 25 週では100%のマウスに SCC が発生した。COX-2 阻害薬を与えた群と与えなかかった群の間で特に癌の進行具合や肉眼的な腫瘍のボリュームに差は見られなかった。RT-PCR では、癌発生初期において Foxp3 がコントロールに比べて有意に発現量が高く、癌発生・進行とともに癌マウスにおける Foxp3 の量は有意に減少した。IL-10 も同様に癌マウスにおいてコントロールマウスより多い傾向にあったが有意差は見られなかった。TGF- は癌発生初期において逆にコントロールマウスより

有意に少なく癌進行とともに増加する傾向 にあった。

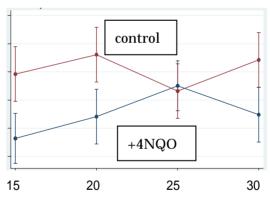
# Foxp3



IL-10



TGF-



COX-2 阻害薬を投与(投与量 2 種類)した群と投与していない群との間には有意差は見られなかった。

免疫染色において、CD8 陽性細胞はかなり少なく、1 視野に 1 個あるかないかであり、統計的解析の対象となりえなかった。Foxp3 陽性細胞は 4NQO のみ投与群で他の 3 群よりも癌発生初期に多く、進行とともに差が無くなった。Foxp3 陽性細胞は癌浸潤部尖端付近に多く見られた。

考察: 今回の実験で、Treg は舌癌発生初期に

おいてコントロールに比べて 10 倍以上多く 浸潤していた。我々は、Treg は舌癌発生初期 に発癌に大きく関わっていると予想した。ヒ ト舌癌切除標本における研究で Treg が多い ほど予後が良い傾向にあったという過去の 報告は、ひょっとするとまだ進行が初期段階 にある舌癌に Treg が多かっただけかもしれ ないと考えた。IL-10 は MHC Class II の発現 を抑制し抗原提示を弱め、腫瘍免疫を抑制す ると考えられている (14)。IL-10 は Treg と 腫瘍細胞の両方から分泌され(15) Treg は 癌の進行とともに減り、腫瘍は増大していく ためお互いの効果が相殺し、結果として Treg よりなだらかな減少傾向をたどると考察し た。TGF- は癌の発生過程・癌の種類によっ て促進的に働くか抑制的に働くかその役割 は変化する(16)。SCCにおいては、early stage の進行を抑制し、late stage の進行を助長す るといわれている(17)。その機序までは不 明だが、我々は何らかの作用で、舌 SCC 発生 初期には TGF- の発現が抑制され、癌の発生 に好都合な環境が作られるのではないかと 考えた。我々は COX-2 阻害薬の投与により Treg が減少し舌癌の進行が抑制されること を期待した(12、13)。肺癌においてはCOX-2 阻害薬投与により生命予後が改善する(18)。 しかし、今回の実験では COX-2 阻害薬の明ら かな効果は認められなかった。腫瘍防御の主 たる働きをなすのが CD8 陽性 T 細胞であり、 腫瘍への CD8 陽性細胞の浸潤は予後良好因子 とされている(19、20)。今回の実験ではCD8 陽性T細胞を殆ど認めなかったため検討でき なかったが、これは今回のマウス舌癌モデル にあまり炎症が起きていないせいではない かと考えた。我々は今回の実験結果から、 Treg は舌癌発生初期に関与し、初期段階で Treg を抑制することがそれ以上の進行を抑 制することにつながるのではないかと考え た。

< 引用文献 >

Noy R, Pollard JW, Tumor-associated macrophages: from mechanisms to therapy, Immunity, 41, 2014, 49-61 Roncarolo MG, Bacchetta R, et al, Type 1 T regulatory cells, Immunol Rev 182, 2001, 68-79

Weiner HL, Induction and mechanism of action of thransforming arowth factor-beta-secreting Th3 reglatory cells. Immunol Rev, 182, 2001, 207-214 Curiel TJ, Coukos G, et al, Specific recruitment of regulatory T cells in ovalian carcinoma fosters immune privilege and predicts reduced survival, Nat Med, 10, 2004, 942-949 Hiraoka N, Onozato K, et al, Prevalence of FOXP3+ regulatory T cells increases during the progression of pancreatic ductal adenocarcinoma and premalignant lesions, Clin Cancer Res, 15, 2006, 5423-5434

Katz SC, Bamboat ZM, et al, Regulatory T cell infiltration predicts outcome following resection of colorectal cancer liver metastases, Ann Surg Oncol, 20, 2013, 946-955

Viguier M, Lemaitre F, et al, Foxp3 expressing CD4+CD25(high) regulatory T cells are overexpressed in human metastatic melanoma lymph nodes and inhibit the function of infiltrating T cells, J Immunol, 173, 2004, 1444-1453 Bron L, Jandus C, et al, Prognostic value of arginase-II expression and regulatory T-cell infiltration in head and neck squamous cell carcinoma, Int J Cancer, 132, 2012, E85-E93

Badoual C, Hans S, et al, Prognostic value of tumor-infiltrating CD4+ T-cell subpopulations in head and neck

cancers, Clin Cancer Res, 12, 2006, 465-472

Shang B, Liu Y, et al, Prognostic value of tumor-infiltrating FoxP3+ regulatory T cells in cancers: a systematic review and meta-analysis, Sci Rep. 5, 2015, 15179

Vitale-Cross L, Czerninski R, et al, Chemical carcinogenesis models for evaluating molecular-targeted prevention and treatment of oral cancer, Cancer Prev Res (Phila), 2, 2009, 419-422

Baratelli F, Lin Y, et al, Prostaglandin E2 induces FOXP3 gene expression and T regulatory cell function in human CD4+ T cells, J Immunol, 175, 2005, 1483-1490

FOXP3+CD4+CD25+ adaptive regulatory T cells express cyclooxygenase-2 and suppress effector T cells by a prostaglandin E2-dependent mechanism, J Innunol, 177, 2006, 246-254

Yaqub

S.

al.

Mahic

Μ.

Mannino MH, Zhu Z, et al, The paradoxical role of IL-10 in immunity and cancer, Cancer Lett, 367, 2015, 103-107

Strauss L, Bergmann C, Szczepanski M, et al, unique subset CD4+CD25highFoxp3+ T cells secreting interleukin-10 and transforming growth factor- 1 mediates suppression in the tumor microenvironment, Clin Cancer Res 13, 2007, 4345-4354

Massagué, J, Blain SW, Lo RS, TGF-beta signaling in growth control, cancer and heritable disorders, Cell, 103, 2000, 295-309

Han G, Wang XJ, Roles of TGFsignaling Smads in squamous cell carcinoma, Cell Biosci, 1, 2010, 41 Edelman MJ. et al. Eicosanoid modulation in advanced lung cancer: cyclooxugenase-2 expression positive predictive factor celecoxib + chemotherapy-Cancer and Leukemia Group B Trial 30203, J Clin Oncol, 26, 2008, 848-855

Kawai O, Ishii G, et al, Predominant infiltration of macrophages and CD8+ T cells in cancer nests is a significant predictor of survival in stage IV nonsmall cell lung cancer. Cancer, 113, 2008, 1387-1395

Naito Y, Saito K, et al, CD8+ T cells infiltrated within cancer cell nests as a prognostic factor in human colorectal cancer, Cancer Res, 58, 1998, 3491-3494

#### 5 . 主な発表論文等

# [雑誌論文](計10件)

- (1) Tachibana T, <u>Orita Y</u>, et al, Glottic cancer in patients without complaints of hoarseness. Head Neck, 查読有, Suppl 1, 2016, E316-20
- (2) <u>Orita Y</u>, Sugitani I, et al, Prospective evaluation of zoledronic acid in the treatment of bone metastases from differentiated thyroid carcinoma, Ann Surg Oncol, 查読有, 22, 2015, 4008-13
- (3) Hirai M, Orita Y, et al, How long should we continue S-1 as adjuvant chemotherapy for squamous cell carcinoma of the head and neck?, Acta Otolaryngol, 查読有, 135, 2015, 1079-85
- (4) Tachibana T, Orita Y, et al, Prognostic factors and effects of early surgical

- drainage in patients with peritonsillar abscess, J Infect Chemother, 査読有, 20, 2014, 722-5
- (5) Hanakawa H, Orita Y, et al, Yoshino T, Does HMGB1 predict occult neck lymph node metastasis in early tongue carcinoma? A case-control study of 26 patients, J Laryngol Otol, 查読有, 128, 2014, 926-31
- (6) Hanakawa H, <u>Orita Y</u>, et al, Yoshino T, Reguratory T-cell infiltration in tongue squamous cell carcinoma, Acta Otolaryngol, 査読有, 134, 2014, 859-64
- (7) Tachibana T, <u>Orita Y</u>, et al, Time-lag between symptom onset and laboratory findings in patients with subacute thyroiditis, Auris Nasus Larynx, 査読 有, 41, 2014, 369-72
- (8) <u>Orita Y</u>, Ogawara T,et al, Leriche operation for parotid gland pathology, Acta Otolaryngol, 査読有, 134,2014, 413-5
- (9) Hanakawa H, <u>Orita Y</u>, et al, Novel and simple prognostic index for nasal natural killer/T-cell lymphoma, Head Neck, 査読有, 36, 2014, 551-6
- (10) Orita Y, Sato Y, et al, Characteristic ultrasound features of mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma of the salivary and thyroid gland, Acta Otolaryngol, 查読有, 134, 2014, 93-9

#### [学会発表](計 6件)

Orita Y, Marunaka H, et al, Kikuchi-Fujimoto disease; evaluation of the prognostic factors and analysis of the pathologic findings, 13<sup>th</sup> Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Dec 3-4, 2015, Tokyo, Japan

Miki K, Orita Y, Tachibana T, et al, COX-2 inhibition may suppress the Treg infiltration into tongue squamous cell carcinoma, The joint meeting of 4<sup>th</sup> congress of Asian society of head and neck oncology & 39<sup>th</sup> annual meeting of Japan society for head and neck cancer. June 3-6, 2015, Kobe, Japan

Orita Y, Tachibana T, et al, Human papillomavirus infection may be associated with local recurrence of tongue SCC in young adults, The joint meeting of 4<sup>th</sup> congress of Asian society of head and neck oncology & 39<sup>th</sup> annual meeting of Japan society for head and neck cancer. June 3-6, 2015, Kobe, Japan

折田 頼尚、三木 健太郎、橘 智靖、 丸中 秀格、花川 浩之、西崎 和則、 他、舌癌発症・進行過程における癌微小 環境の研究、日本耳鼻咽喉科学会総会・ 学術講演会(第 116 回) 2015 年、5 月 21~23 日 (東京)

折田 頼尚、三木 健太郎、他、舌癌発生・進行過程におけるマクロファージの 浸潤、日本頭頚部癌学会、(第38回)2014年、6月12・13日 (東京)

三木 健太郎、<u>折田 頼尚</u>、他、舌癌発 生過程における Foxp3 の発現、日本頭頚 部癌学会、(第 38 回)、2014 年 6 月 12・ 13 日 (東京)

#### 6. 研究組織

# (1)研究代表者

折田 頼尚 (ORITA, Yorihisa) 岡山大学・耳鼻咽喉頭頸部外科学・講師

研究者番号:90362970